

道徳的実践力を高める道徳の時間の工夫

～道徳的価値の自覚を深める発問の工夫と対話活動を通して～

うるま市立南原小学校教諭 横田 恵

I テーマの設定理由

児童の道徳性の発達は、児童を取り巻く社会の影響を大きく受ける。現代の社会は、科学技術の進歩・発展が人間の生活の中に多大な恩恵をもたらす一方で、それを活用する人間の側の問題として、社会全体のモラルの低下や家庭及び地域社会の教育機能の低下等、様々な影響も出てきているといわれる。このように、児童の自然な道徳性の発達を阻害している現象（身の回りの社会や地域、郷土、国といったものへの無関心という私生活主義の広がり等）も多く指摘されている。

中央教育審議会答申（平成20年）において、我が国の子ども達は生命尊重の心や自尊感情が乏しいこと、基本的生活習慣の確立が不十分、規範意識の低下、人間関係を築く力や集団活動を通じた社会性の育成が不十分などの課題が示された。小学校学習指導要領には、「これからの学校における道徳教育は、こうした課題を視野に入れ、児童が夢や希望をもって未来を拓き、一人一人の中に人間としてよりよく生きようとする力が育成されるよう、一層の充実が図られなければならない。」と記されている。

本学級の児童は明るく素直であり、本校の「だそう・声・汗・知恵」を合い言葉として日々の学習や生活に取り組んでいる様子が見られる。特にやるべき事が分かっている朝の活動は、全校児童が一斉に外に出て汗を流している。一方、指示がない場合に主体的に考えて行動出来る子が少ない。

これまでの授業実践をふり返ってみると、道徳的実践力を育む時間ではなく教師の一方的な教え込みになっていなかったか。あるいは、知識としての価値の理解にとどまっていたのではないかと疑問に思うことがある。子ども達は授業の中で、「あいさつをすると気持ちがいい。」「相手のことを考えて言葉を遣いたい。」等、教師が期待することを口にすると、普段の生活では行動が伴わないことが見られる。それは、「この時の主人公の気持ちを考えてみましょう。」という読解指導のような発問が多く、そこに「なぜだろう。」「自分だったらどうするだろう。」とする切実感のある発問ではなかったと思われる。と同時に他者との対話である話し合いも時間を十分にとらせることなく、時間が来たら展開終末のふり返りという授業展開になっていた。つまり、児童の本音に迫ることができず、道徳的価値の自覚に深まりがなかったように思われる。一人一人がねらいとする道徳的な価値について真剣に考え、道徳的価値を主体的に自覚し実践力をつけていくためには、道徳の時間の指導をより充実したものにしなければならない。

そこで本研究では道徳の時間において、道徳的価値を深める視点からの「発問の工夫」「対話活動」を効果的に取り入れることで道徳的価値の理解を深めていくことにする。

以上のことから主題を「道徳的実践力を高める道徳の時間の工夫」、副題を「道徳的価値を深める発問の工夫と対話活動を通して」とした。

II 研究目標

道徳的価値の自覚を深める発問の工夫と対話活動を通して、豊かな心を持ち、進んで自己の生き方を考える児童を育成する。

III 研究仮説

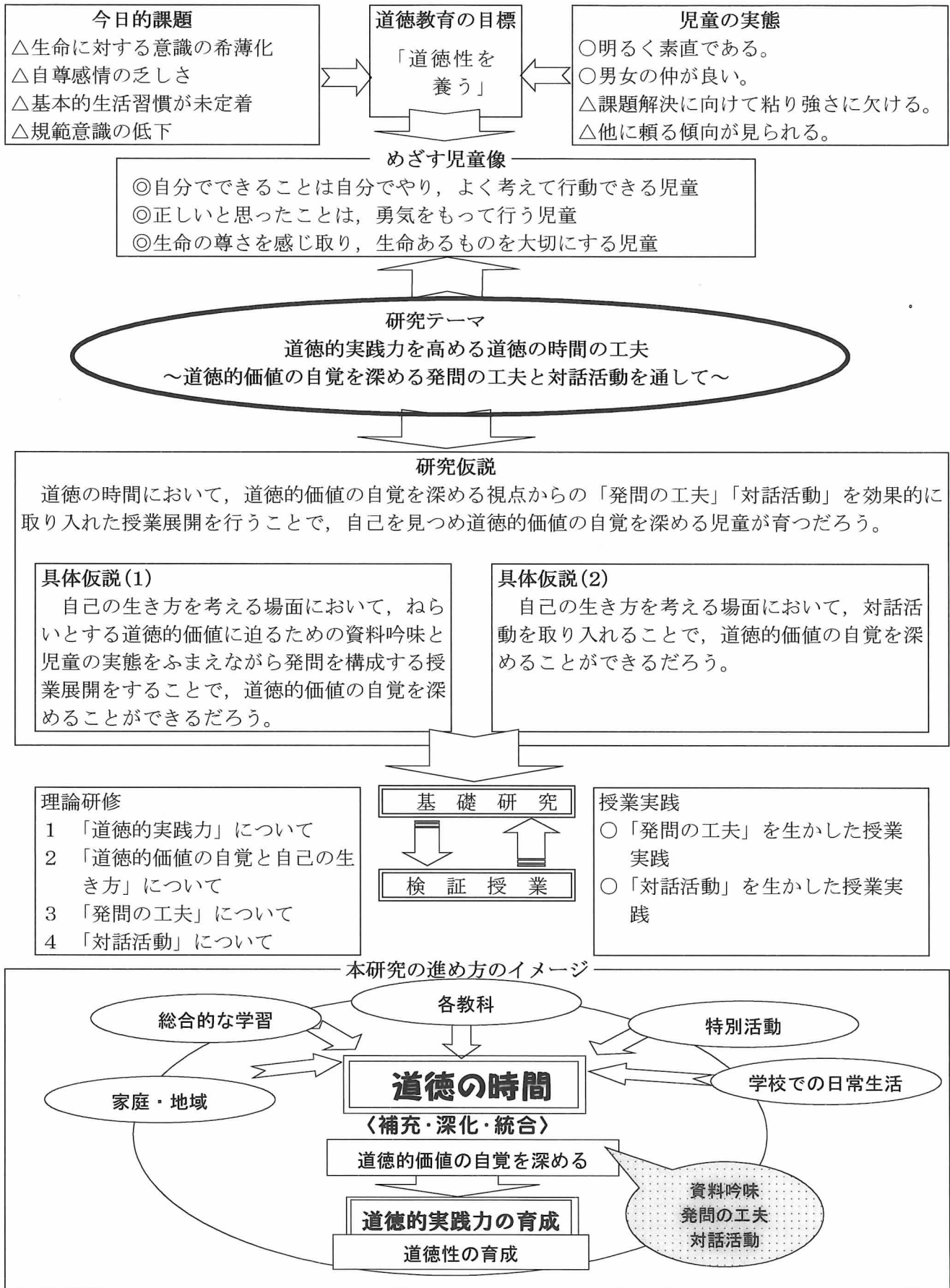
1 基本仮説

道徳の時間において、道徳的価値の自覚を深める視点からの「発問の工夫」「対話活動」を効果的に取り入れた授業展開を行うことで、自己を見つめ道徳的価値の自覚を深めることができる児童が育つだろう。

2 具体仮説

- (1) 自己の生き方を考える場面において、ねらいとする道徳的価値に迫るための資料吟味と児童の実態を踏まえながら発問を構成する授業展開をすることで、道徳的価値の自覚を深めることができるだろう。
- (2) 自己の生き方を考える場面において、対話活動を取り入れた授業展開をすることで、道徳的価値の自覚を深めることができるだろう。

IV 研究の全体構想図



V 研究内容

1 「道徳的実践力」について

小学校学習指導要領解説 道徳編（以下「解説道徳編」とする）（「第3章 道徳」の「第1 目標」後段）では、道徳的実践力について以下のように示されている。

道徳的実践力とは、人間としてよりよく生きていく力であり、一人一人の児童が道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、将来出会うであろう様々な場面、状況においても、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味している。それは、主として道徳的心情、道徳的実践力、道徳的実践意欲と態度を包括するものである。

道徳の時間が目指すものは「道徳的実践力を育成すること」である。赤堀博行（2010）は「道徳的実践力とは子どもたちの将来において生きて働く力であり、それは長期展望（道徳の授業を実施する義務教育の9年間）と綿密な計画に基づいた丹念な指導によって育成される。つまり、道徳的実践力は一朝一夕には育たないということです。」と述べている。

道徳的実践力を高めるためには、道徳教育の目標である「道徳性を養う」ことである。「解説道徳編」では、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。」と示されている。表1は、この道徳性と諸様相を示した表である。

表1 道徳性と諸様相


	<p>【道徳性】 いつ、いかなるときも時と処に応じて善い行いができるような内面的資質 (行動の習慣化ではない。)</p>
道徳的心情	→道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情 人間としてよりよい生き方や善を志向する感情
道徳的判断力	→それぞれの場面において善悪を判断する能力 人間としてどのように対処することが望まれるか判断する力
道徳的実践意欲・態度	→道徳的心情や判断力を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志のはたらき 道徳的行為への身構え

図1は道徳性と道徳的実践力の関係を赤堀が示したものである。道徳の時間の道徳的実践力は「〇〇したい。」と思う気持ち（心情、判断力、実践意欲・態度）を育てていくことであり、行為の変容（道徳的行為、道徳的習慣）を目指すものではないということである。

柴原弘志（2012）は、道徳的実践力と道徳的実践を「熱せられるビーカーの水が対流をおこしながら温度を上げていく状態が実践力の高まりで、気化する状態が実践」とイメージしている。このことから道徳的実践と道徳的実践力が相互に響き合って道徳性が高められていくと考える。

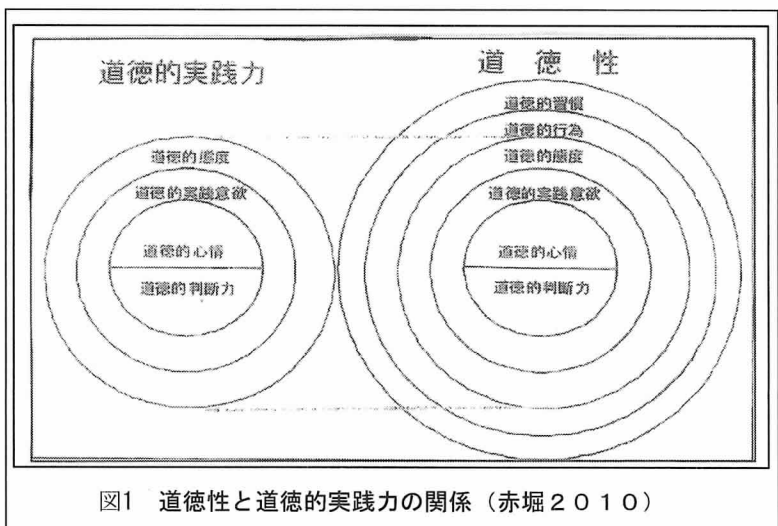


図1 道徳性と道徳的実践力の関係（赤堀2010）

そこで、道徳の時間を一人一人の児童が道徳的価値の自覚を深め、進んで自己の生き方を考える時間にしなければならない。それは、週1時間の道徳の時間を着実に行うことだけでなく、子どもの将来を見据えた時間であるという自覚をもった時間、子どもの変容を直接的にみる即効性を求めるようなものではなく、内面的資質を育てる時間にする必要があるのではないかと感じている。

2 「道徳的価値の自覚を深める」と「自己の生き方」について

(1) 道徳的価値とは

道徳的価値とは、「解説道徳編」では、指導内容で4つの視点からとらえ、内容項目を分類整理し、内容の関連性と発展性を明確にしている。

- 1 主として自分自身に関すること。
- 2 主として他の人とのかかわりに関すること。
- 3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。
- 4 主として集団や社会に関すること。

内容項目は、発達段階に応じて小学校低学年で16項目、中学年で18項目、高学年で22項目、中学校で24項目が発展的に示されている。それらは人間として生きる上で必要であり、人間らしさを身につけていく基礎基本となる価値のことである。

(2) 道徳的価値の自覚を深めるとは

道徳的価値は先に述べた内容項目に含まれている。「自覚」とは、国語辞典によると「自分のおかれてる状態、地位、立場などを自分でよく知ること 自分で感じとること」と示されている。

つまり「道徳的価値の自覚を深める」とは、人間としてよりよく生きる上で大切な道徳的価値を自分の生活とのかかわりでふり返って見つめ直し、自分のこととして深く感じたり考えたりすることである。それは、自分にとって意味のある大切なこととして意識することである。このことは人間らしさを身につけていく上において、必要不可欠なものである。この道徳的価値の自覚を図るために、「解説道徳編」において、次の3つの事柄を押さえて指導する必要があると示されている。

○道徳的価値について理解させること（価値理解）

道徳的価値が人間らしさを表すものであるため、同時に人間理解や他者理解を深めるようにする。

○自分とのかかわりで道徳的理解がとらえられること（自己理解）

道徳的価値の理解と同時に自己理解を深めるようにする。

○道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を培わせること（自己発見・課題）

(3) 自己の生き方とは

道徳解説編では、自己の生き方について以下のように示されている。

人格の基盤を形成する小学校の段階においては、児童が道徳的価値の自覚を深め、自己の中に形成された道徳的価値を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。児童は、道徳的価値の自覚を深める過程で同時に自己の生き方についての考えも深めているが、特にそのことを強く意識して指導することが重要である。

自己の中に形成された道徳的価値が人間らしさを身につけていく基礎基本となる価値であると先に述べた。道徳的価値の意味やそれと自己とのかかわりについて一層考えを深化させる役割を担う道徳の時間を通して、思いやりの心、努力する心、あきらめない心等、一人一人の児童が持っていることを自覚させる。そして、他者とのかかわりの中で自分を見つめ、よりよく生きようとする心がある自分があることを気付かせる時間にするのが重要だと感じている。それが自己の生き方についての指導を充実させることにつながるのではないかと考える。

3 発問の工夫について

「解説道徳編」の「3 道徳の時間に生かす指導法の工夫」(2)発問の工夫では、以下のように示されている。

発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される教師による発問は、児童の思考や話し合いを深める重要な鍵になる。

発問を工夫するということは、児童を道徳的価値のよさや素晴らしさの面に着目させ、自分にもそのよさがあることに気付かせ、受け入れることだと理解している。そのための発問を精選し、考える時間・ゆとりを与えることにも考慮して授業を組み立てる必要がある。

道徳の時間では主にこの3つの発問で授業が展開されている(表2)。

表2 道徳の時間における主な発問

中心発問	・ ・ ・ねらいを達成するための授業の核となる発問 多様な価値観を引き出し、道徳的価値の追究や理解へと結びつける発問 (ねらいとどうかかわるか。子どもの反応を予想し検討する。)
基本発問	・ ・ ・中心発問との一貫性を考えながら、ねらいとする価値にどう迫らせるか。中心発問を受けどう自覚を促し深めるかの発問 (中心発問を生かすための前後の発問)
補助発問	・ ・ ・基本発問や中心発問を補ったり、視点を変えて行う発問 (繰り返し発問、揺さぶり発問。)

発問を考えるにあたり廣瀬久(1999)は、

- 教師自身が本時も目標やねらいをどう考えるかを明確にしておくこと
- 目標やねらいに対する児童の実態をよく把握しておくこと
- 教材(資料)の精選し、資料分析をする
- 発問、順序などの検討を十分にすること

を大切にすることとし、内面を育てる観点から次のように留意することが必要であると述べている(表3)。次頁には道徳の時間における発問の類型を示す(表4)。

表3 発問構成の留意点

①子どもが自分自身の問題として気付き、受け止め、子どもの実感や本音に基づく自分の考えを持ち本音が出せるような発問(子どもの実態を把握し、子どもが本音を出せるような発問)
②資料を使い、その中でひとり一人の子どもが登場人物に託し、共感したり、反発したりなどしながら、ありのままの自分自身の感じ方や考え方を自由に表現できるような発問(ここでは、資料に登場する人物の行為や感じ方、考え方(他人の価値観)にふれ自分との対比が行われる。)
③正誤を問うものではなく、一人一人の子どもが多様な感じ方、考え方、価値観のでのような発問(多様な感じ方、考え方、価値観の出る中でそれと自分を対比し考えたり、感じたりしながら、自己を深めていくことができる。)
④道徳的価値についての発問(ねらいとする道徳的価値にかかわる発問である。道徳的価値そのものについて教師自らの考え方をもつことが大切であり、また、子どもとのかかわりでその道徳的価値を捉えられるように工夫する事が大切。)
⑤知識として知っていても、それが自分にとって本当に大切であるとか、自分にもあったと自覚させるような発問(多くの価値は、子どもは知っている。しかし、知っているだけでは道徳的実践力とは言えない。話し合いや今までの自分の経験や生き方を振り返る中で、はっと気付いたり、自分の本音や本当の姿に気付かせ意識させることが大切。)
⑥学習したことを自分の課題として考え続けていくような発問や助言(学習したことが、自分の課題として心にかかり、自分の価値観を変えたり、実践意欲を持たせるような工夫が大切である。)

表4 道徳の時間における発問の種類

発問の種類	発問例
<p>①事実や経験などを問う 導入でねらいに気付かせたり、視点をそろえる場合や、展開後段で自己を見つけさせる場合に使われることが多い。</p>	<p>「……したことがあるか。」 「……をどう思うか。」 「どんな事だったか。」「何が問題なのか。」など</p>
<p>②場面・状況を問う 展開前段で使われることが多い。資料提示が適切で児童にその場面・状況等がイメージできれば必要のないこともある。</p>	<p>「だれとだれが出て来たか。」 「その時の様子は。」 「だれがどうしたか。」など</p>
<p>③心情を問う 展開前段で資料中の人物に託して自分の思いや感じ方を語らせたり、展開後段で自己を見つめ、ふり返る際などに使われ、基本発問や中心発問となる重要な発問である場合が多い。</p>	<p>「どこに心を打たれたのか。」 「そのときの気持ちはどう思ったのだろう。」など</p>
<p>④考えや理由、関連や判断を問う 前項同様の使われ方が多く、重要な発問である。</p>	<p>「そのときどんなことを考えていたのか。」 「なぜそう考えるのか。」 「〇〇と比べてどっちがどう？」 「どうすればいいのだろう。」など</p>
<p>⑤予想や原則を問う 展開前段と後段の間に用いられることが多く、児童の意見や発言を整理したり、まとめたり、秩序付けたりするときにも使われる。</p>	<p>「もし自分だったらどうするの。」 「そのことはいつでも、どこでも、だれでも、いいのかな。」など</p>
<p>⑥子どもの反応を生かしながら問う 「切り返し」「ゆさぶり」の発問と呼ばれる。児童の反応を使うので児童自身に関わりが深く、適切な発問は児童の主體的な学習に効果がある場合が多く、児童の感じ方や考え方を深めたりできる。また、考えるヒントを与えたり、視点の変換や方向付けをすることもできる重要な発問。</p>	<p>「〇〇さんは……と言っているがみんなどう思う。」 「〇〇さんの意見について考えてみよう。」 「君は……と考えたんだね。」</p>
<p>⑦自己を見つめ、ふり返りを問う 展開後段で使われることが多く、ねらいとする道徳的価値にかかわり、今までの自分の経験（直接・間接）を問い、自己をふり返り、見つめ、価値の一般化や自覚を図ることに使われる。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>行為や事実のみではなく、それに対する自分の感じ方や考え方、価値観などについて問うことが大切。</p> </div>
<p>⑧本時で学んだことを問う 本時の授業で心に残っていることを問うとか、授業の感想などを問うことにより、本時のまとめをしたり、意欲と態度につなげることができる。</p>	

道徳の時間において「児童自身が自らの内面に問いかけるような発問」を自覚を深める発問と考える。そのために、建前ではない本当の自分自身の実感や本音に基づく感じ方や考え方、気持ち、行動の在り方や生き方に気付かせることができるような発問を工夫することは大切なことである。授業を実践していく中でこの発問を考える（構成する）ためには、資料吟味も重要な鍵を握っていることに気付いた。指導に当たる教師がどれだけ資料を研究し検討しているか、教師がどれだけ深く資料を読み取り自分なりの資料観をもっているかが授業の質を決める発問の工夫につながることを実感した。

4 「対話活動」について

「解説道徳編」の「3 道徳の時間に生かす指導法の工夫」(3) 話し合いの工夫に以下のように示されている。

話し合いは、児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり、道徳の時間においても重要な役割を果たす。意見を出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じて効果的に話し合いが行われるように工夫する。

また、「4 言葉を生かし考えを深める工夫」(「第3節 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」の3)には、このように示されている。

(4) 自分の考えを基に、書いたり話し合ったりするなどの表現をする機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自分の成長を実感できるよう工夫すること。

このことを受けて、自分の考えを基に表現する機会の充実(2)には、話し合いを深めるための効果的に表現させる工夫が示されている。

- ア 児童に自分の考えをもたせる
 - ・何について考えるのか指導者が明確にする。
 - ・児童の発達段階や実態を考慮する。
- イ 自分の考えを基に書いたり話し合ったりする
 - ・何でも言い合え、認め合える学級をつくる。
 - ・教師の受容的な態度、話し合いのルールを明確にする。
 - ・話し合いの良さの実感を体験させる。
 - ・自分の考えの整理、自分自身の体験を想起させる。

教師がこれらの意義を意識した活動を取り入れることにより、児童が道徳的価値をより強く自分のかわりごとらえることができるようになることを考える。こうした工夫を「対話活動」として具体化する。

多田孝志(2006)は、「対話とは言語や非言語により、相手とコミュニケーションを行い、共有できる価値観や概念を生み出していく行為である。」と定義している。教育用語辞典での対話の意味は「1対1で向かい合って自由に話し合うこと。お互い同士が聞き手になったり話し手になったりして話し合うこと」とあるが、多田は「より広い概念でとらえ、多数の人々の論議・討議の場面でも自己と他者が向き合っているということで、1対1のみならず複数以上の参加者による話し合いも『対話』にとらえる。」とし対話の持つ機能、特色、目的について次のように述べている(表5)。

表5 対話の機能・特色・目的

機能	<ul style="list-style-type: none"> ○「伝える・知らせる」(自分の考えや感想、情報など) ○「意志や感情の伝え合い」(説明、説得、納得、共感などの行為) ○「人と人とのかわりづくり」(相互理解、相互啓発、相互扶助が生起し創造的・発展的な関係の構築)
特色	<ul style="list-style-type: none"> ○相互的な関係(話し手と聞き手が絶えず入れ替わる。) <li style="padding-left: 20px;">→ 聞き手を意識、話し手に共感、納得、反発→ 受け止めていく ○プロセス→話し手は聞き手の反応により表現方法を変化させ、聞き手は話し手から受ける影響により自分を変化させる。(相互の変化は絶えず継続し続ける。)
目的	<ul style="list-style-type: none"> ○話し手は、聞き手に自分の伝えたいことを表現し、それを認識・理解・共感・納得してもらうこと。聞き手は相手の伝えたいことを認識・理解・共感・納得すること。 ○自分自身が深まったり、変わったりすること。(自己変革) ○様々な人々と異見・意見を出し合い、たとえ一つの結論に至らなくても英知を出し合い、一人では到達し得ない何かをつくりだすこと。 ○対話のプロセスを通じて互いの信頼・親睦を深め、共通の目的に向かってよりよいものを生み出す仲間としての関係を構築すること。

横山利弘(2007)は「道徳の時間の指導は、対話を抜きにしては成立しない。」と述べている。

対話をするにより今まで気付かなかった自分に気付いたり、自分自身を見つめ直したりすることで自分自身をより深く見つめることが可能になる。そして、対話をするにより、完全な一致はできなくても、共に話し合ったことにより共通な部分を膨らませる。理解は十分にできなくても相手の立場や思いに気付くことができる。自己のよりよい生き方に向けた道徳的実践意欲につながると考える。

このことを道徳の時間で考えてみると、話し手と聞き手が互いの伝えたいことを表現する内には「自分の考えを伝えたい」「相手の考えを聴きたい」という主体的な学びがある。また、もう一人の自己との対話（自己内対話）を通して自己を深く見つめることができると思われる。さらに、互いに意見を出し合い、一人では到達し得ない何かを作り出すことは、他者との対話（他者対話）を通して友だちの多様な価値観に気付く、自分の価値観を深めることにつながると考える。

そこで道徳の時間にはおける「対話活動」を自己内対話、他者対話としてとらえる。このことを鹿児島市立紫原小学校は、自己内対話と他者対話の関連を図2のようにとらえ「自己内対話を充実させるための他者対話」ということで示している。

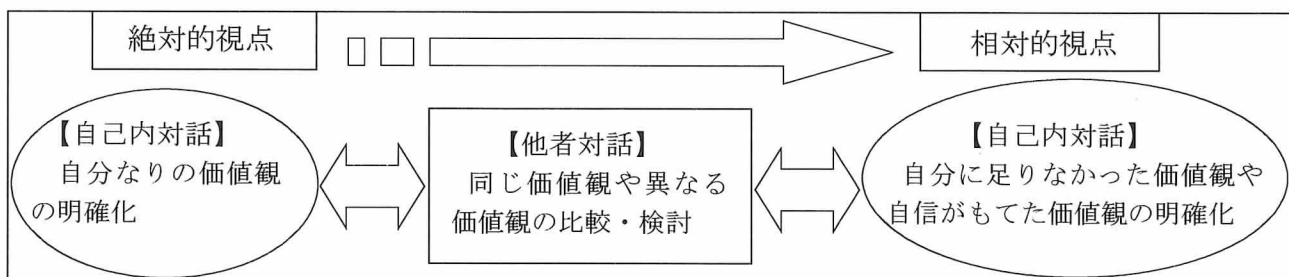


図2 自己内対話と他者対話の関連（「紫原小学校の道徳（2010）」参考）

この関連性を参考して授業の展開活動を以下のように位置づけた。

- 導入段階 ➡ ・事前アンケート、写真等の提示やこの時間のねらいとする価値に関連する発問により、これまでの自分を振り返らせる。〔自己内対話〕
- 展開前段 ➡ ・資料等を提示し、その内容を共感的に理解させ、基本発問に対する自分の考えをワークシートに記入させる。〔自己内対話〕
 - ・自分の考えを基に、友だちと交流させる。（ペアトーク、グループでの話し合い）
 - ・多様な考えに触れさせる。〔他者対話〕
- 展開後段 ➡ ・中心発問に対する自分の考えをワークシートに記入させる。
 - ・自分の考えを基に、友だちと交流させる。（ペアトーク、グループでの話し合い）
 - ・多様な考えに触れさせる。〔他者対話〕 新たな気付き〔自己内対話〕
- 終末段階 ➡ ・授業のふり返りをワークシートに書かせる。〔自己内対話〕
 - ・友だちの感想を聴いて友だちの考えを知らせる。〔他者対話〕

VI 指導の実際

1 検証授業計画

事前調査に道徳性の意識調査（4月）と価値項目に関するアンケート（7月）を実施した。その結果、課題となる項目「自立・節度」「正義・勇気」と全学年の重点目標となっている「生命尊重」を取り上げ、以下の3本の検証授業を計画し実施した。

	検証授業①	検証授業②	検証授業③
主題	できることは自分で	命のつながり	勇気
価値	1-(1) 自立・節度	3-(1) 生命尊重	1-(3) 正義・勇気
ねらい	自分でできることは自分でやり、よく考えて節度ある生活をする意欲や態度を育てる。	人の命は、多くの祖先のリーによって連綿と受け継がれてきたことがわかり、かけがえない命を大切にしようとする心情を育てる。	勇気とは自分自身正しく行動しようとする心であることに気づき、正しいと思ったことは勇気をもって行おうとする意欲や態度を育てる



(1) 基本仮説

道徳の時間において、道徳的価値の自覚を深める視点からの「発問の工夫」「対話活動」を効果的に取り入れた授業展開を行うことで、自己を見つめ道徳的価値の自覚を深めることができる児童が育つだろう。

(2) 具体仮説

- ① 自己の生き方を考える場面において、ねらいとする道徳的価値に迫るための資料吟味と児童の実態を踏まえながら発問を構成する授業展開をすることで、道徳的価値の自覚を深めることができるだろう。
- ② 自己の生き方を考える場面において、対話活動を取り入れた授業展開をすることで、道徳的価値の自覚を深めることができるだろう。

2 検証の計画と観点等

事前調査	<ul style="list-style-type: none"> ・目的：学級・学年・学校全体の実態から課題を明らかにし、指導の重点項目に資する。 ・調査内容：①道徳性の意識調査（学年） 4月実施 ②価値項目意識調査（全学年） 7月実施 ③道徳の授業における調査（学級） 9月実施 ・調査方法：アンケート 		
検証授業	検証場面	検証の観点	検証方法
	導入  展開  終末	【発問の工夫】 ①基本発問（ねらいにせまるために欠くことのできない発問） ・資料の流れを学級全体で共有し、児童の体験に戻して考えさせる発問になっていたか。 ②補助発問（基本発問や中心発問を補ったり、視点を変えて行う発問） ・切り返したり、揺さぶらせる発問になっていたか。 ③中心発問（ねらいを達成するための授業の核となる発問） ・ねらいにかかわって、児童の考え方・感じ方が多様に引き出せる発問になっていたか。 ・ねらいとする価値に対して、自分自身がどのように実践してきたか、どのように考えてきたか振り返らせる発問になっていたか。 ・道徳的実践意欲につながる発問になっていたか。 【対話活動】 ①自己内対話（ワークシートへの記入） ・自分なりの考え（価値観）をもつことができたか。 ②他者対話（ペアトーク、グループでの話し合い） ・友だちの多様な価値観に気付き、自分の道徳的価値観を深めることができたか。 ③自己内対話（ふり返り） ・児童が自分に足りなかった価値観や自信がもてた価値観の明確にすることができたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・ワークシート ・自己評価 ・写真 ・ビデオ ・授業後のアンケート実施分析
事後調査	<ul style="list-style-type: none"> ・検証授業後の道徳の授業におけるアンケート（学級） 事前調査と検証授業後との比較 *検証授業後に実施 		
検証の視点 指導過程の展開で、「発問の工夫」①～③「対話活動」①～③を行ったことは、児童の道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を高めるために有効だったか。			

3 検証授業の実施と各授業の分析・考察

検証授業① 実施日：平成24年11月20日（木）5校時

ア 主題名 「やり続ける心」

イ 資料名 「目覚まし時計」 内容項目1-(1)自立・節度

ウ 本時の学習




○本時のねらい

自分でできることは自分でやり、よく考えて節度ある生活をする意欲や態度を育てる。

○授業仮説

展開後段で自分ならどのような生き方をしたいかを考える場において、自分の生活をふり返りながら、決めたことをやり続けていくとどういう良さがあるのかを自分で考えたり、全体に伝え合ったりすることで、自分で決めたことはやり続けようとする意欲や態度をもつことができるだろう。

エ 展開 (基：基本発問 中：中心発問 補：補助発問)

	学習活動	主な発問と児童の反応	留意点及び支援の視点
導入 5分	1 今日の学習の見通しを持つ 2 グラフを見て話し合う。 	基：このグラフは何を表しているグラフでしょうか。 ・がんばりノートやっているやっていない人のグラフ ・目標を達成を達成した人していない人のグラフ	説：グラフはアンケート結果（2学期の目標途中経過）だと伝える。
展開 前 段 30分 後 段	3 資料「目覚まし時計」を聞いて話し合う。 ・決まりを守れなかったリカ的心情を考える。  ・自分の生活をふり返る。 	基：リカが決まりを守れなくなったのは、どうしてでしょうか。 ・めんどくさい。 ・一度くらいいいや。 ・あきてきた。 ・気がゆるんだ。 指示：自分の行動基準（ABC）はどれに近いのかネームプレートで示してみましょう。 A→自分で考えて行動する。 B→言われたからやる。 C→やらない	・最初は張り切って自分で作った決まりを守っていたがだんだん諦めかけている主人公に共感させる。 補：リカはどうして目覚まし時計をプレゼントされたのでしょうか。 補：行動基準AとCの違いは何ですか。
	4 続けることの良さを話し合う。 	中：Aの世界を続けていくと、どんな良さがあるのでしょうか。 ・自分のやりたいことができる。 ・もっとやりたくなる。 ・心臓が飛び出すくらい嬉しくなる。 ・ほめられる。（やる気が出る） ・友だちがいっぱいできる。	・ワークシートに自分の考えを書く。 ペアトーク交流。 全体の話し合いへとつなげていく。
まとめ 10分	5 価値の整理 ・学習のふり返しをする。 	基：今日の学習で気づいたことや考えたことを書きましょう。 ・自分も「やってみたい」「今の目標を達成したい」と思いました。 ・弱い心がいつの間にか無くなっていくくらいとってもとっても嬉しくなりました。	・書く時間の確保に努める。 ・数名の児童に発表させる。

[検証の考察] ○良かった点 △課題・改善点

導入

(1) 基本：このグラフは何を表しているのでしょうか。

①発問の意図

資料に入る前に似たような体験を想起させておくことで、資料の登場人物をつかみやすくなるのではないかと。

②児童の姿から

○児童の2学期目標途中アンケートが自分の身近な事ことを話題にしたことで、スムーズに資料に入ることができたので大変よかった。

○クラスのアンケート結果だったので発言しやすい雰囲気になった。

展開前段

(2) 基本：リカが決まりを守れなくなったのはどうしてでしょうか。

①発問の意図

最初は、張り切って自分でつくった決まりを守っていたがだんだんあきらめかけてきた主人公の気持ちに共感するのではないかと。

②児童の反応から

○資料範読後、内容把握のため挿絵を拡大し紙芝居風に再現することで、内容理解の厳しい子への配慮となった。(内容理解ができていないと自分の考えは持てない)

○主人公の気持ちと、児童自身の行動が重なり共感できていた。

○行動基準を示すネームプレートの活用は良かった。発問の工夫として主人公の心の世界を図式化した後、今の自分を示すことで自己理解ができた。

△「どうしてリカは目覚まし時計をプレゼントされたのでしょうか。」の補助発問は無くてもよかった。(この発問がなくても児童は日頃の生活を想起していた。)

△ネームプレートのはり方は、枠ではなくバロメーター的なはり方を取り入れAに近いB、Bに近いCなどがあってもよかった。(その方がより本音に近づける)

展開後段

(3) 中心発問：Aの世界を続けていくとどんな良さがあるのでしょうか。

①発問の意図

資料の読み取りではなく、資料からはなれ主題に迫るもので、続けていく良さを考えることで児童自身が「こうなりたい！」という気持ちをもつのではないかと。

②児童の反応から

△1 - (1)自立・節度であったが内容は2 - (2)勤勉・努力になっていなかったか。もし主題に迫るために以下のような発問にしてみると価値に迫ることができたのではないかと。

〈例〉「自分で考えてやるってどういうことそれによって続けられるってどういうこと？」

・「あの子はできているのになぜ自分はできないんだろう。」

・「やり続けるために何が必要か。」

対話活動

(1) 自己内対話 (ワークシートへの記入)

自分の考え・・・書けた 100%

(2) 他者対話 (ペアトーク)

友だちの意見と自分の意見を比べたり、新しい発見をした・・・できた 100%

(3) 自己内対話 (ワークシートへ記入, 振り返り)

資料のみ・・・0% 資料以外 (自分事)・・・100%

①児童の反応から

○全員自分の考えをもつことができたのでペアでの話しもできていた。

△ペアトークの方法 (書いたものを読むのではなく自分の考えを伝える手段としての意識)

検証授業② 実施日：平成24年12月13日（木）5校時

ア 主題名 「命のつながり」

イ 資料名 「いのちのまつり」 内容項目3-(1)生命尊重 関連価値2-(4)感謝

ウ 本時の学習

○本時のねらい





人の命は、多くの祖先のリレーによって連綿と受け継がれてきたことがわかり、かけがえのない命を大切にしようとする心情を育てる。

○授業仮説

①展開前段の自分ならどのような生き方をしたいかを考える場面において、自分の命はたくさんのご先祖様のリレーによって受け継がれてきたことを知り、基本発問の「どんな気持ちからコウちゃんは『いのちをありがとう』と言ったのでしょうか。」を考え、話し合うことでかけがえのない命を大切にしようとする心が育つだろう。

②展開後段の自分ならどのような生き方をしたいかを考える場面において、たくさん命のつながりに感謝する気持ちを感じ取り、中心発問の「『コウちゃんががんばれ』はどんなことをがんばれということでしょうか。」を考え、伝え合うことで、かけがえのない命を大切にしようとする心が育つだろう。

エ 展開 (基：基本発問 中：中心発問 補：補助発問)

	学習活動	主な発問と児童の反応	留意点及び支援の視点
導入 5分	1 今日の学習の見通しを持つ。 2 アンケートから命について関心をもつ。 	説：みなさんが「命」から想像する言葉はこんな言葉でした。 1→家族、おじい・おばあ 2→こころ 3→一つしかないもの	・アンケートの結果は表にして掲示する。 質：みなさんに命をくれた人は誰ですか。 質：お父さんやお母さんの命は？
展開 前段 30分 後段	3 資料「いのちのまつり」を聞いて話し合う。 ・自分の命は多くの祖先の命であることに気付く。 	基：どんな気持ちからコウちゃんは「命をありがとう」と言ったのでしょうか。 ・ぼくに命をくれてありがとう。 ・たった一つしかない命をありがとう。 指示：ワークシートに自分の考えを書いたら4人グループになって話し合います。今日のリーダーさんから時計回りに発表して下さい。	・お父さん、お母さんが自分い命をくれた人という実感はあったがたくさんの祖先のつながりを知る事でコウちゃんの不思議な気持ちに共感させる。 補：いつも使うありがとうと同じありがとうかな？
	4 自分について考える。 	中：「コウちゃんががんばれ」はどんなことをがんばれということなのでしょう。 指示：ワークシートの□に自分の名前を入れさせる。	補：コウちゃんにがんばれと言ったのは誰ですか。 ・吹き出しカードに自分の考えを書かせ、書けた子は黒板掲示にはらせる。
まとめ 10分	5 価値の整理 ・学習のふり返しをする。 	基：今日の学習で気づいたことや考えたことを書きましょう。 ・長生きして子孫を残して。 ・自分で決めたことは最後まで逃げないでみんなと力を合わせてがんばれ。	・書く時間の確保に努める。 ・数名の児童に発表させる。

[検証の考察] ○良かった点 △課題・改善点

導入

(1) 説明：みなさんが考えた命から想像することはこんな言葉でした。

①意図

資料に入る前に大きなテーマ「生命尊重」の「命」についてふれさせることで、主題を考える上で児童の中に入りやすいのではないかと。

②児童の姿から

○アンケートベスト3の発表で、自分のものがあるかなと食いついて見ていた。

○「みなさんに命をくれた人は誰ですか？」は資料の内容に近い質問だった。

展開前段

(2) 基本：どんな気持ちからコウちゃんは「いのちをありがとう」と言ったのでしょうか。

①発問の意図

児童は自分に命をくれた人のお父さん、お母さんの実感はあったが、たくさんの祖先のつながりを知る事でコウちゃんの不思議な気持ちがしてきたに共感するのではないかと。

②児童の姿から

○資料の内容把握のため挿絵をパワーポイントで、音声を録音して聞かせることで内容理解の厳しい子への配慮となっていた。(最初、機械の不具合で映像が見せられなかったのが残念)

△補助発問で「命をくれただけでありがとうなの?」「かけがえのない命ってなんだろう。」を入れると価値へせまったのではないかと。

△「命をつないでくれてありがとう。」の同じ意見だと深まりがないのでフリートークを入れ児童の言葉をつないでいくとよかった。(切り返したり揺さぶったりする。)

展開後段

(3) 中心発問：「コウちゃんががんばれ」とはどんなことをがんばれということでしょうか。

①発問の意図

ご先祖様のがんばれは、命を大切にしてほしいという気持ちと、自分が今がんばっていることへの声援だということに気付くのではないかと。

②児童の姿から

△多くの児童が自分のがんばりたいことを一生懸命考え、吹き出しに書いていた(勉強がんばれ。部活がんばれ。友だちと仲良くしてね。等)が価値としては命のつながりや大切さについても触れてほしかった。

△教室掲示に家族写真があるのでその活用や祖父母からの言葉、あるいは清明祭にふれると価値の深まりが出て来ていたのではないかと。

対話活動

(1) 自己内対話(ワークシートへの記入)

自分の考え・・・書けた 92% 書けなかった 8%

書けなかった理由(意味があまりよく分からなかった。)

(2) 他者対話(グループ)

友だちの意見と自分の意見を比べたり、新しい発見をした

できた 92% できなかった 8%

できなかった理由(グループになり、どういうことをしたらいいのかわからなかった。)

(3) 自己内対話(ワークシートへ記入 振り返り)

資料のみ・・・4% 資料以外(自分事)・・・96%

①児童の反応から

○基本発問を理解していなかった児童がグループ活動で友だちとの交流により、発問の意味を理解し話合いに参加する事ができていた。

△グループでの話し合いの指導の工夫

検証授業③ 実施日：平成25年1月17日（木）5校時

ア 主題名 「勇 気」

イ 資料名 「手のひらの中の勇気」 内容項目1ー（3）正義・勇気

ウ 本時の学習

○本時のねらい





勇気とは、自分自身で正しく判断して行動しようとする心であることに気づき、正しいと思ったことは勇気をもって行おうとする意欲や態度を育てる。

○授業仮説

①基本発問の「ぼくが思っていた勇気とお父さんが話してくれた勇気はどんなことでしょうか」を考える場面において、児童各々の考えを全体の場に出し合ったりネームプレートで意思表示をすることで、ぼくと父親の勇気の感じ方のちがいに気づき、日頃児童自身の感じている勇気を想起し共感することができるだろう。

②中心発問の「ぼくがあやまろうと思ったのはなぜですか」を考える場面において、児童自身の考えをペアトークし話し合うことで、主人公があやまろうと決意するまでの気持ちの変化を感じ取り正しいと思ったことは勇気をもって行おうとする意欲や態度をもつことができるだろう。

エ 展開 （基：基本発問 中：中心発問 補：補助発問）

	学習活動	主な発問と児童の姿反応	留意点及び支援の視点
導入 5分	1 今日の学習の見通しを持つ 2 勇気について考える。 	基：「勇気ある人」とはどんな人でしょうか。 ・自分ができないことをやる人 ・進んで発表する人 ・注意できる人 ・いじめを許さない人	・テレビドラマの勇気のある人にふれてもよい。 補：勇気を出してよかったという経験はありますか。
展開 30分	前 3 資料「手のひらの中の勇気」の前半部分を聞いて話し合う。 ・ぼくとお父さんの勇気に気付く。 ・フリートークで自分の考えを発表する。 4 自分について考える。 	基：ぼくが思っていた勇気とお父さんが話してくれた勇気はどんなことでしょうか。 ぼくの勇気 ・特別なことをやること お父さんの勇気 ・どんな小さいことでも自分で正しいと思ったことをやること 指示：自分がぼくの立場だったら「話せる」「話せない」のどちらに近いかなームプレートをはらせる。	補：ぼくは勇気ある人でしょうか。 補：自分はだれの勇気に近い？ 補：本はもう乾いているはずだよ。 みんなもう気にしていないよ。 (話せる人への揺さぶり)
	後 5 勇気の本質、人間の弱さに気づき考える。 	中：ぼくがあやまろうと思ったのはなぜですか。 ・このままだとすっきりしないから。 ・お父さんの言っている勇気が本当の勇気だと思ったから。 ・みんなの大切な本だから。	補：勇気が出せた時はどんなときだった ・ぼくの勇気の変容に気付かせる。 ・ペアトーク後全体の話し合いへつなげる
まとめ 10分	6 価値の整理 ・学習のふり返しをする。 	基：今日の学習で気づいたことや考えたことを書きましよう。 ・今ぼくは勇気がある人がどんな人かわかりました。 ・伝える勇気は大事だと思った。 ・かくさず勇気を出して正直に言った方がいいことがわかりました。	・書く時間の確保に努める。 ・数名の児童に発表させる。

〔検証の考察〕 ○良かった点 △課題・改善点

導入

(1)基本：勇気のある人とは、どんな人でしょうか。

①発問の意図

資料に入る前に似たような体験を想起させておくことで、資料の登場人物の気持ちがつかみやすくなるのではないかと。

②児童の姿から

○勇気ある人を考えることで「勇気」ってどういうことだろうと考えることができた。

○資料へスムーズに入ることができた。

展開前段

(2)基本：ぼくが思っていた勇気とお父さんが話してくれた勇気はどんなことでしょうか。

①発問の意図

2つの勇気を考えることで、自分の感じていた勇気がどれに近いのかを気付くことができるのではないかと。

②児童の姿から

○資料を分割して提示することで、この発問の意図を押さえることができた。(資料分割法)

○登場人物の二人の勇気から、児童自身の勇気について共感できていた。

○意思表示を示すネームプレートの活用は良かった。児童は友だちの意見に左右されることなく自分の意志でネームプレートをはっていた。

○プレートをはらせた後理由を聞く場面で、普段の生活からにじみ出てくる児童自身の本音が多く出ていた。

△補助発問「ぼくって勇気ある人かな？」を基本発問の前ではなく、意思表示のネームプレートをはらせる前にすると、もっと自分と重なるものがあった。(発問の順番)

展開後段

(3)中心発問：ぼくがあやまろうと思ったのはなぜですか。

①発問の意図

主人公のぼくが、あやまろうと決心するまでの心の葛藤を考えさせる中であやまろうと思った視点を自分自身から他者へ向けてのものになるのではないかと。

②児童の姿から

△以下のように発問してみると価値の自覚を深めることができたのではないかと。

・「お父さんから言われなかったらどうしていた？」

・「自分の本だったらどうしていたと思う？」

・「勇気を出したらどんな人になれるのか？」

・「勇気を出したことで、どんな良いことが起こるのか？」等

対話活動

(1)自己内対話（ワークシートへの記入）

自分の考え・・・書けた 100% 書けなかった 0%

(2)他者対話（グループ）

友だちの意見と自分の意見を比べたり、新しい発見をした

できた 96% できなかった 4%

できなかった理由(意味が分からなくなった。言いにくかった。)

(3)自己内対話（ふり返り）

資料のみ・・・0% 資料以外（自分事）・・・100%

①児童の反応から

△ペアトーク後、自分の考えを書かせてもよかった。(ワークシートに書いたものだけの発表になっていた)

VII 仮説の検証

研究の考察は、授業の流れや展開の仕方、教材・資料や事前（9月）・事後（11月、12月、1月）の道徳アンケート、毎時間の授業のワークシートにおける児童の感想などから分析・考察していく。

具体仮説(1)

自己の生き方を考える場面において、ねらいとする道徳的価値に迫るための資料吟味と児童の実態を踏まえながら発問を構成する授業展開をすることで、道徳的価値の自覚を深めることができるだろう。

①資料吟味・発問の工夫について

教師による発問は、児童の思考や話し合いを深める重要な鍵だと言われている。その発問を工夫していく際に児童の実態を知ることと同じくらい資料吟味が大きな鍵をもっていることを授業を通して感じた。それには、徹底した読み込みが大事であり、そこから児童の体験に戻して考えさせる基本発問、思考を深めさせねらいを達成するための中心発問、思考を広げる助けとなる補助発問を構成していくことである。実際の授業展開の中でどのような発問が最適であるかを考える時には、何度も資料を読み返した。行間を読むことで中心発問が見えてきた。発問の数や順序なども検討し実施した。

図3は、発問に対して児童が「自分の考えを書くことができたか」という問いに対しての結果である。検証前の9月は書けた児童が67%、書けなかったが33%の結果だった。書けなかった児童の理由として「ビデオとか見ると書けるんだけど」という意見があった。文章だけの資料では、内容理解ができずにいる児童の実態を知り、発問の工夫の前に発問を効果的にするには資料提示の工夫も必要であることに気付いた。そこで以下のように手立てを考え実施した。

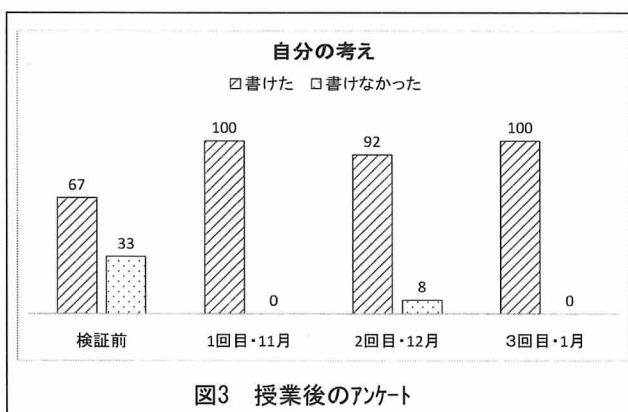


表6 資料提示の工夫

1回目・11月	教師の判読後、発問の前に挿絵を提示し全体で内容確認
2回目・12月	絵本の挿絵をパワーポイントで提示し、音声をCDで流す
3回目・1月	資料を前半部分と後半部分に分けて発問（分割提示法）

1回目の検証授業の結果、100%の児童が自分の考えを書くことができた。書けていなかった児童が書けた理由として「自分で考えていたらどんどん書けるようになった」「言いたいことがいっぱい浮かんできたから」ということだった。このことから発問の工夫と同時に資料提示の工夫も大切であることが分かった。2回目の検証授業で書けなかった児童の理由は「何を聞いているか難しかった」「分からないから書けなかった」だった。児童にとって何についてどう考えればよいのかがよく分かるように発問を考えることも課題となった。しかし、この児童もグループ活動で友だちの考えを聞くことで「こんなことだったのか。」と理解することができていた。資料1は検証授業ふり返りのワークシート、資料2は、検証前後の児童の変容のワークシートである。

資料1 児童のワークシート

*下線部は研究員による表記

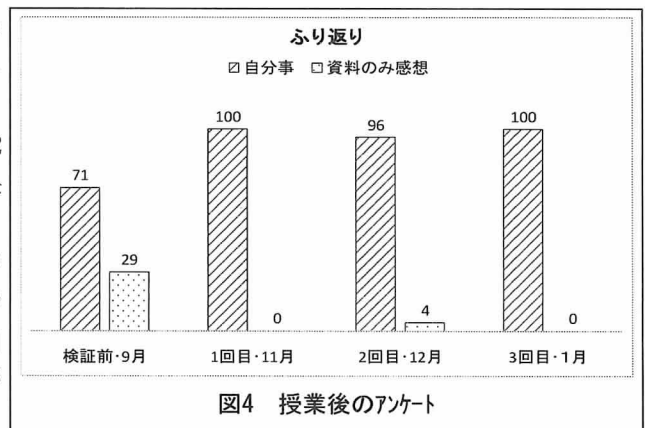
11月	今日の授業で <u>自分もやってみたい</u> や今の目標を達成したいと思いました。言われてからやるんじゃなくて自分から積極的にできたらいいなと思いました。 <u>みんなの発表がとってもいいことだな</u> と思いました。あきらめそうになったらみんなが言ったことを思い出してがんばろうと思いました。 A児
12月	これからも命を大切にしたいなあと思いました。ぼくはこの授業をして、 <u>おじいちゃんがぼくに「長生きしろよ」とよく言っているの</u> を思い出しました。吹き出しに書いてみておじいちゃんは、「命を大切にしてください」と言っているんだろうとなあと思いました。 B児

1月	私はすぐに話せても勇気のない人もいます。私はものをこわしてだまってかくしていたら後悔したことがありました。その時ある本を読み勇気づけられあやまろうと決心したことがありました。最初は点の大きさの勇気が手のひらぐらいになっていたこの勇気をもっと大きくする勇気をつくりたいです。 C児
----	--

資料2 児童のワークシート（検証授業前・授業後の変容）

検証授業前	検証①・11月	検証②・12月	検証③・1月
<p>今日道徳の授業で「百羽のつる」をやりました。99羽のつるがいて子づるが病気なのにあきらめず飛んでいたけど羽が動かなくなり落ちて、99羽のつるがあみとなって99羽のつるが子づるを助けたところが私は感動しました。 D児</p> <p>99羽のつるが1羽のつるを助けていたところがすごかった。子づるを助けたのに何も知らずに湖のところへ飛んでいった。100羽はあきらめないで子づるを助けていたところがすごかったです。 F児</p>	<p>今日の道徳の授業は「目覚まし時計」でした。私はBの世界に入ったが、なぜ言われてからやらないんだろうと疑問に思った。リカさんも最初はやる気満々だったけれどだんだんめんどくさくなってきた。私もお母さんに言われてからやる。私は目標をあきらめずに目標を達成するようがんばりたいです。</p> <p>リカさんはあきらめたけど自分は絶対にあきらめないようにがんばりたい。ぼくは夢を失わないようにがんばりたい。大人になっても何でもできるようになりたい。困っても全部やりとげるようになりたい。だから大人になっても一生懸命頑張りたい。</p>	<p>今日の道徳の授業で、私はご先祖さまがいなかったら私たちはいなかったと思いました。私はご先祖さまからもらった命を大切にしたいと思います。なぜかという、次の子どもに大切な命を次へ次へとわたしたいからです。もっともって命のことを知りたかったです。</p> <p>今日は命についての勉強でした。ご先祖さまということを知りました。ぼくたちのご先祖さまは、多分ぼくたちを見守っていると思いました。</p>	<p>今日の道徳の授業で私は、みんなが大事にしていた本をぬらしてしまったら「あやまろう」と思う。なぜかという自分がやったことはちゃんとあやまらないといけないと思ったからです。それに自分の中でこうかと思うからです。</p> <p>今日ぼくは、みんなの話を聞いて勇気がなんなのかがよく分かりました。ぼくも自分がやったことがダメなことだったらぜったいみんなに言いたいと思います。ぼくはダメなことをしたら最初に言う決めました。なぜかという最初で言わないと後悔するからです。</p>

児童のふり返しシートから、知識としての価値の理解ではなく、授業の中で自分事として価値のよさを捉えていることが分かる。図4でも検証前のふり返しでは資料のみの感想が29%に対して検証後は2回目の4%以外は、全員自分事としての感想の結果になっている。「道徳的価値の自覚を深めるとは、人間としてよりよく生きる上で大切な価値を自分の生活とのかかわりでふり返って見つめ直し、自分のこととして深く感じたり考えたりすることである。」の定義からすると価値の自覚を深めることにつながったと言える。



以上のことから、資料吟味と児童の実態を踏まえながら発問を構成する授業展開をすることは道徳的価値の自覚を深めるために有効であると言える。

自分で考えると難しい。ペアで考えると新しい意見が出てくる。グループ考えるともっとすごくなったと思う。



道徳をやって自分で考えたのがいっぱい書けるようになりました。ペアやグループで考えることができて良かったです。



自分で考えると自分だけの考えになってしまふけれどペアで考えると意見が分かれて話し合いが多くなりました。

自分で考えると力がつく。ペアで考えるともっとも力がつく。グループで考えると違いを比べることができる。

児童のアンケートや授業の様子から、対話活動により今まで気付かなかった自分に気付いたり、自分自身を見つめ直すしたりすることができた。他に自分の考えを『『すごいこと書いたね。』と友だちに認められて嬉しかった。』や「自分の考えを言ったとき友だちや先生が『あーそうか』『おーすごいね』と言ってくれるから嬉しい」「どんな意見も認めてもらえるから嬉しい」という感想があった。このことから児童の自己存在感・自己肯定感が高まったのではないかと感じている。これは対話活動において自分の考えを表現する上ではとても大切なことであり、対話が成立するために必要なことだと考える。対話をするにより完全な一致はできなくても、共に話し合ったことにより共通な部分を膨らませ相手の立場や思いに気付くことで自己のよりよい生き方に向けた道徳的実践意欲につながったのではないかと感じた。

以上のことから、対話活動を取り入れた授業展開をすることは、道徳的価値の自覚を深めるために有効であると言える。

Ⅷ 研究の成果・課題・対応策

1 成果

- (1) ねらいに迫る効果的な発問をするための資料吟味を行うことで、道徳的価値に迫ることができた。
- (2) 発問によって自分自身をふり返らせ、自分の考えをワークシートに書かせることによって対話活動に活かすことができた。
- (3) ペアやグループでの話し合いを全体の場に伝える活動を展開することで、多様な考えにふれ、より深く道徳的価値について考えさせることができた。

2 課題

- (1) ねらいに迫る発問構成のための資料の吟味（教材分析）を深める。
- (2) 対話活動（ペア、グループ）で児童同士のやりとり（学び合い）を増やし、道徳的価値の自覚を深めさせる。

3 対応策

- (1) より深い教材吟味をするために、学年間でも教材研究をして授業を組み立てていく。
- (2) 対話活動を充実させるために、教師が対話の視点（納得・気づき・比較・検討等）を明確にし各教科等でも意識する。

【参考文献】

- ・小学校学習指導要領解説 平成20年8月 『道徳編』 文部科学省
- ・柴原弘志 2012年 『心の元気！』 1000人フォーラム
- ・加藤宣行 2012年 『教師の発問力』 東洋館出版社
- ・赤堀博行 2010年 『道徳教育で大切なこと』 東洋館出版社
- ・横山利弘・藤永芳純・竹田敏彦監修 2010年 『心に響く道徳教育の創造』 三省堂
- ・横山利弘 2007年 『道徳教育，画餅からの脱却』『道徳教育とは何だろうか』 廣済堂あかつき株式会社
- ・多田高志 2006年 『対話力を育てる』 教育出版
- ・佐藤学 2003年 『教師たちの挑戦』 小学館
- ・廣瀬久 1999年 『道徳的価値を深める発問の工夫』 明治図書
- ・吉本均編著 1989年 『教材解釈と発問づくり』 明治図書

* 副次的な資料として（道徳の時間に関するアンケートの結果・在籍児童24人）

①資料に出てくる登場人物で自分と似ていると思うことがありますか？・・・（ある・24人）

- ・ぼくもこんなことをしているなあと思った。
- ・自分の悪いところ，いいところが出て来たりする。
- ・勇気が出せないところが似ている。
- ・めんどくさがりとかが出て来たときにているなあと思った。

全ての授業を副読本を使って実施した。学習する価値項目によって今の自分と似ているところがあると全員が感じている。児童の中には「自分と似ている人が出ると一生懸命考えて直します。」と書いてあった。資料の持つよさを感じている。

②展開終末のふり返りの時間は大切だと思いますか？・・・（思う・24人）

- ・ぼくってこんなことが言いたかったんだということが分かりそうになるから。
- ・次から直さないといけないところや続けられないといけないところに気付くから。
- ・授業の分かったことを書くとずっと覚えているし，書いたらこんなことをしたなあとふり返ることができるから。
- ・ふり返ると次からどんなところに気をつければよいなど分かるようになるから。

学習のふり返りのよさを全員が感じている。何かまちがったことをしそうになった時に授業のことを思い出すという児童が2人いた。書くことで曖昧だった自分の考えが徐々に整理されたり，日頃忘れていた体験を思い出したりすることで道徳的価値をより強く自分とのかかわりで捉えることができるようになってきていると思われる。

③道徳の勉強は将来役に立つと思いますか？・・・（思う・24人）

- ・努力やいろいろなことをやる意味が分かるから。
- ・社会で必要なこと「勇気」や「努力」などを習うから。
- ・将来いけないことをやりそうになったときに子どもころのことを思い出せるから。
- ・ダメなことといいことが引きしまるから。

役に立つと全員が感じている。役に立ったと思った時は「もうやめようと思った時に最後までやり遂げることを思い出して少しでも続けられるようにしようと思った。」や「勇気の授業の後，勇気を出して隠し事を伝えた」等，これは道徳的実践意欲・態度が育ってきているのではないかと感じている。中には，役立つとは思っているが普段の生活でまだ役に立ったことはない感じている児童が3人いた。近い将来，役立つ種になることを願っている。

半年間の研究を通して，入所前に「道徳の授業をしても，子どもは全然変わらない。」とむなしさばかりを感じていたが，研究を通して豊かな心をはぐくむ道徳教育がどのようなものかを再確認することができた。子ども達の将来において生きて働く道徳的実践力を育成するために週一時間の道徳の時間を「自分は・・・」と自分を見つめ「あっそうか！」と価値を理解し「そういう行いや心は素晴らしいなあ。」という道徳的心情が高まり「そういう心を私たちも持っているんだね。」の人間のよさの自覚をもち「よし！私も・・・」とする道徳的実践意欲・態度をはぐくむ時間にしていきたい。そこでこれからは，学校全体の意図的，計画的，継続的，組織的な取り組みを重視し実践していきたい。